

鹿児島県薩摩半島西岸から得られた九州初記録のヤセハリセンボン

久保田雄斗¹・伊東正英²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院農林水産学研究所（鹿児島市）
k6115478@kadai.jp² 笠沙町漁業協同組合（南さつま市）³ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 16 June 2026

Revised 18 June 2026

Accepted 18 June 2026

Published 18 June 2026

DOI 10.34583/ichthy.68.0_28

Yuto Kubota, Masahide Itou and Hiroyuki Motomura. 2026. First Kyushu record of *Diodon eydouxi* (Tetraodontiformes: Diodontidae) from the western Satsuma Peninsula, Kagoshima, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 68: 28–30.

Abstract

A single specimen (197.1 mm standard length) of the Pelagic Porcupinefish, *Diodon eydouxi* (Diodontidae), distributed worldwide from tropical to temperate zones, was collected from the coast of Kasasa, western Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, Kyushu, Japan. In Japanese waters, the species has previously been recorded only from Hakodate (southern Hokkaido), Mutsu (northern Aomori), Kashiwazaki (central-west of Niigata), Nanao (eastern Ishikawa), Kashimanada Sea (eastern Ibaraki), Kamogawa (southern Chiba), Tateyama (southern Chiba), Sagami Bay (southern Kanagawa), Susami Port (southern Wakayama), Yaku-shima island (Osumi Islands), and Okinawa-jima island (Okinawa Islands). Therefore, the presently reported specimen from Kasasa represents the first record of *D. eydouxi* from Kyushu.

ハリセンボン科ハリセンボン属魚類（Diodontidae: *Diodon* Linnaeus, 1758）は、世界中の熱帯から温帯の海域を中心に分布しており（Leis, 2006；松浦, 2017）、日本近海からはこれまでにヤセハリセンボン *Diodon eydouxi* Brisout de Barneville, 1846、ハリセンボン *D. holocanthus* Linnaeus, 1758、ネズミフグ *D. hystrix* Linnaeus, 1758、ヒトヅラハリセンボン *D. liturosus* Shaw, 1804 の4種が記録されている（Leis, 2006；藍沢・土居内, 2013；松浦, 2017；本村, 2026）。このうち、ヤセハリセンボンは、国内においてこれまで、北海道南部から石川県にかけての日本海沿岸と和歌山県にか

けての太平洋沿岸、屋久島、および沖縄島から散発的に記録されていた（松浦・吉野, 1984；本間, 1995；舟橋, 1998；Motomura and Harazaki, 2017；井黒・今村, 2023；工藤ほか, 2022；本田ほか, 2024）。

2026年3月に鹿児島県の薩摩半島西岸（南さつま市笠沙町沖）から1個体のヤセハリセンボンが得られた。薩摩半島から得られた標本はヤセハリセンボンの九州からの初めての記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

標本の計数・計測は Leis (1978) と Leis and Randall (1982) にしたがった。頭頂棘列は Leis and Randall (1982) にしたがって、前頭棘から鰓孔上方に位置する棘までの連続する横列棘数を計数し、眼窩上棘とそれに並ぶ縦列棘は含めなかった。体表の棘は解剖ばさみを用いて慎重に切り離して計測した。これに加え、釣り具の強化チューブを細かく刻み、各棘に個別に刺した後、回収して計数することにより総棘数を算出した。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した。計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm 単位まで行い、小数第2位を四捨五入した。計測値は体長に対する百分率で示した。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村（2009）に準拠した。生鮮時の体色の記載は、固定前に撮影されたカラー写真（Fig. 1）に基づく。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。本研究で用いた研究機関略号は、KAUM（鹿児島大学総合研究博物館）である。

Diodon eydouxi Brisout de Barneville, 1846

ヤセハリセンボン

(Fig. 1)

標本 KAUM-I. 223326, 体長 197.1 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦崎ノ山東側, 31°25'44"N, 130°11'49"E, 水深 27 m, 定置網, 2026年3月17日, 伊東正英採集。



Fig. 1. Fresh specimen of *Diodon eydouxi* (KAUM-I. 223326, 197.1 mm SL) from the western Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, Japan. A: lateral view; B: dorsal view.

記載 計数形質：背鰭条数 16；臀鰭条数 16；胸鰭条数 19；尾鰭条数 9；頭頂棘列数 2, 4, 5, 3；背鰭前棘数 15；臀鰭前棘数 13；胸鰭間背面棘数 9；総棘数 386. 体各部測定値の標準体長に対する割合 (%)：頭長 32.9；肛門前長 60.0；背鰭前長 71.8；尾柄長 23.8；尾柄高 8.5；眼径 7.9；頭幅 24.4；体幅 27.3；両眼間隔 19.3；口-鼻孔間長 4.1；鰓孔高 7.1；口幅 10.3；背鰭最長鰭条長 21.7；胸鰭最長鰭条長 18.5；尾鰭最長鰭条長 27.6；背面最長棘長 10.4；前額部棘長 9.2；腹面最長棘長 7.8.

体は前後に向かって長い楕円形を呈し、尾柄に向かって細くなる。体背縁の輪郭は吻端から眼窩前端直上までは直線状をなして大きく上昇し、そこから背鰭基底後端までは上方向に緩やかに膨らんだ弧状で、背鰭基底後端から尾柄部後端にかけて緩やかに下降する。体腹縁の輪郭は下顎先端から臀鰭基底後端までは下方向に緩やかに膨らんだ弧状で、臀鰭基底後端から尾柄部後端にかけて緩やかに上昇する。

体は全体が可動性のある棘に覆われ、これらの基部は 2 叉する。尾柄部はやや側扁し、背面に棘がある。眼は正円形をなす。鼻孔は 2 対で、吻部側方に位置する。上顎先端

は下顎先端のやや前方に位置し、両顎ともに強大な歯板が 1 枚ずつある。鰓孔は裂孔状で、胸鰭基部直前に位置する。背鰭および臀鰭は体後方に位置する。背鰭は 1 基で、背鰭起部は臀鰭起部直上よりわずかに前方、背鰭基底後端は臀鰭基底後端直上よりわずかに前方に位置する。背鰭と臀鰭はともに先端がとがり、やや鎌状を呈する。胸鰭は大きく、扇状をなす。腹鰭は存在しない。尾鰭は後縁が円みを帯びた円型をなす。すべての鰭において、棘条は存在しない。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) 一体の背面側は濃紺色で、眼径より小さい黒色斑が多数分布する。腹面側は白色で、黒色斑はわずかに分布するのみである。各鰭はいずれも茶色だが、臀鰭は基底から中央部まで白い。背鰭および尾鰭には黒色斑が分布する。虹彩は黒色だが、前縁が白い。瞳孔は黒色である。

分布 本種は国内からはこれまでに北海道函館市、青森県むつ市、新潟県柏崎市、石川県七尾市、鹿島灘、相模湾、千葉県鴨川市、千葉県館山市、和歌山県周参見港、屋久島、および沖縄島から記録されており (松浦・吉野, 1984；林・長谷川, 1988；市川ほか, 1992；本間, 1995；舟橋, 1998；Senou et al., 2006；Motomura et al., 2010；Motomura and

Harazaki, 2017; 井黒・今村, 2023; 工藤ほか, 2022; 本田ほか, 2024), 本研究により新たに鹿児島県の薩摩半島西岸(南さつま市)からも確認された。

備考 本報告で記載した標本は, 体全体が可動性のある棘に覆われ, これらの基部が2又すること, 両顎に強大な歯板が1枚ずつあること, および腹鰭を欠くことからハリセンボン属 *Diodon* の特徴 (Leis, 2001; 松浦, 2017) に一致した。さらに, 背鰭と臀鰭の鰭条数がともに16であること, 胸鰭条数が19であること, 臀鰭前棘数が13であること, 尾柄部背面に棘があること, 背鰭と臀鰭は先端がとがり, やや鎌状を呈すること, 体の背面側が濃紺色で, 眼径を超える大きな黒色斑がないこと, および背鰭および尾鰭に黒色斑が分布することが Leis (2001), 藍沢・土居内 (2013), および松浦 (2017) の示したヤセハリセンボン *Diodon eydouxi* の特徴によく一致したため, 本種に同定された。

なお, ヤセハリセンボンの総棘数に関する記録はこれまでなかったが, 本研究で笠沙町産標本の総棘数を計数したところ, 386であった。同属他種と比較すると, ハリセンボンは257–354, ヒトヅラハリセンボンは248–542であり (本村萌夏氏, 私信; 松浦, 2017), ヤセハリセンボンの棘数はヒトヅラハリセンボンの変異幅に含まれ, ハリセンボンを上回った。個体数を増やして棘数の比較を行うことによって, 種ごとの傾向的な相違が明らかになる可能性がある。

本種の日本国内における記録については, 分布の項にて述べたとおり, 本研究で得られた標本 (KAUM-I. 223326) は, 九州からのヤセハリセンボンの初記録となる。なお, 本種の屋久島からの記録は目視 (市川ほか, 1992) によるものであるため (Motomura et al., 2010; Motomura and Harazaki, 2017), 本報告は本種の標本に基づく鹿児島県からの初めての記録でもある。

謝 辞

鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアのみなさまには, 標本の作製および登録作業においてご協力いただいた。Ichthy 編集委員の藤原恭司氏には原稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々に深謝する。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」, JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), 文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究

拠点形成」, および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 藍沢正宏・土居内龍. 2013. ハリセンボン科, pp. 1743–1745, 2241–2242. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 林 公義・長谷川孝一. 1988. ヤセハリセンボン *Diodon eydouxi* の漂着記録. 神奈川県自然誌資料, 9: 15–18.
- 舟橋正隆. 1998. 茨城県沿岸の魚類相. 茨城県自然博物館研究報告, 1: 75–96.
- 本田康介・瀬能 宏・和田英敏. 2024. 相模湾産魚類目録 (改訂). 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 53: 127–218.
- 本間義治. 1995. 新潟県魚類目録補訂 (XIII). UO, 43: 11–28.
- 市川 聡・砂川 聡・松本 毅. 1992. 屋久島産魚類の概観, pp. 19–46. 屋久島沿岸海洋生物調査団 (編) 屋久島沿岸海洋生物学術調査報告書.
- 井黒浩輔・今村 央. 2023. 北海道函館市白尻で採集されたハリセンボン科魚類2種の北限記録. 北海道大学水産科学研究彙報, 73: 27–32.
- 工藤孝浩・岡部 久. 1991. 三浦半島西部沿岸の魚類. 神奈川県自然誌資料, 11: 29–38.
- 工藤孝浩・山田和彦・三井翔太・門田高太・瀬能 宏. 2022. 三浦半島南岸魚類目録. 神奈川県自然誌資料, 43: 97–142.
- Leis, J. M. 1978. Systematics and zoogeography of the porcupinefishes (*Diodon*, Diodontidae, Tetraodontiformes), with comments on egg and larval development. Fishery Bulletin, 76: 535–567.
- Leis, J. M. 2001. Diodontidae, pp. 3958–3965. In Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.) FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 6. Bony fishes part 4 (Labridae to Latimeriidae), estuarine crocodiles, sea turtles, sea snakes and marine mammals. FAO, Rome.
- Leis, J. M. 2006. Nomenclature and distribution of the species of the porcupinefish family Diodontidae (Pisces, Teleostei). Memoirs of Museum Victoria, 63: 77–90.
- Leis, J. M. and J. E. Randall. 1982. *Chilomyxus spilostylus*, a new species of Indo-Pacific burrfish (Pisces, Tetraodontiformes, Diodontidae). Records of the Australian Museum, 34: 363–371.
- 松浦啓一. 2017. 日本産フグ類図鑑. 東海大学出版会, 秦野. 127 pp.
- 松浦啓一・吉野哲夫. 1984. フグ亜目魚類3種の日本からの記録. 魚類学雑誌, 31: 331–334.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 本村浩之. 2026. 日本産魚類目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 39. URL (3 June 2026)
- Motomura, H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima Island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183.
- Motomura, H., K. Kuriwa, E. Katayama, H. Senou, G. Ogiwara, M. Meguro, M. Matsunuma, Y. Takata, T. Yoshida, M. Yamashita, S. Kimura, H. Endo, A. Murase, Y. Iwatsuki, Y. Sakurai, S. Harazaki, K. Hidaka, H. Izumi and K. Matsuura. 2010. Annotated checklist of marine and estuarine fishes of Yaku-shima Island, Kagoshima, southern Japan, pp. 65–248. In Motomura, H. and K. Matsuura (eds.) Fishes of Yaku-shima Island – A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo.
- Senou, H., K. Matsuura and G. Shinohara. 2006. Checklist of fishes in Sagami Sea with zoogeographical comments on shallow water fishes occurring along the coastlines under the Influence of the Kuroshio Current. Memoirs of the National Science Museum, 41: 389–542.